

趣意書

所謂世界大戰なる一大颶風一過して既に關せし春秋三、長きが如くにして僅に三年、短かきが如くにして而も呼ぶが如く易々たるものではなかつた。國家生活の、否人間生活の總ての方面に大小の波瀾と變動とを免れ得なかつたのであります。中に就て、戦後の經濟界の變動は多數人の豫期に背かず襲ひ來つた。而も其の九天直下的の急激さには、萬人均しく色を失ふに至つた程である。人間生活の最眞劔事が、「食ふ」事にあるが如くに、經濟界の變動は即ち人間生活への一大脅威であつて、其の影を投ずる所社會の總ての階級に亘らざるを得なかつた。此の處に人界の個人間の階級間の或は部族間國家間の愚劣なる鬭争の芽が萌すのである。

而も國際聯盟の如き理想的平和施設の存し、其の活動亦着々其の緒に就きつ、あるに拘らず國家間稍もすれば鬭争を缺き勝ちなるが如く、精神的及物質的に、公私の多くの調和機關設置せらるゝに拘らず社會各階級間の争闘が日々其の激烈さを加ふる有様であります。兩者闘ふ時、共に完きを得ないのは、古賢の喝破せし所。私達は車に乗る人も車を曳く人も、徒走する人も、人皆が現代に疲れたる顔色を隠し得ないのを見逃してはなりません。今日人々が分立して贊否の論に置々たる思想上の變動も、其の基く所は亦此處に存するのであります。其の甲論し、乙駁する所、必ずしも諍言のみではない。故に、國民の多數は、此の間に立つて、其の岐路に迷ふのである。此の指針は何人の手によりて示さるべきでせうか。

問題は、之のみに盡きません。獨、塊斃れて後の日本は、其の對西比利策に、其の對支那策に或は其の海陸の軍備策に對し四周の猜嫌を買ひ、遂に第二の獨乙等の暴評を受くるに至つた。加之日米間の暗雲昨今低迷、既に危機存すとさへ傳へられてゐます、而も事柄は總て焦眉の急に迫つてゐます。事難の排除、問題の解決、は何人の手に俟つべきか。

老人が獨り其の舊智にのみ據り、舊態のみを固守すべき時でない。青年のみが徒らに獨行すべき時だと思ひます。要は士氣。茲に郷黨和親の裡に、或は先人の高教に接し、或は、後人の若き美しきとして熱き血の叫びに聴き、或は其の意氣の昂きを武技の中に見出す事、亦必ずしも意義なき事ではないと思ひます。茲に例年の例に倣ひ、七月三十日及翌三十一日を期して縣下の學生大會及其の聯合演說會を開き度いと思ふ所以であります。

諸賢の御賛同と御援助を乞ひ度く思ふ所以であります。

尙御參考にまで昨年度會計を報告致します。

會計報告

第拾三回佐賀縣學生大會會計報告

一、收入總額	二千四百五十七圓十六錢	イ、班當代	四百八拾五圓八十錢
内 附金		ロ、サイダー類	百二圓八十四錢
一、寄附金	二千三百七圓五十錢	ハ、菓子代	七十八圓
二、學生會費	百四十四圓九十五錢	ニ、懇親會費	七十圓九十錢
三、銀行利子	四圓七十一錢	ホ、寄宿會費	百七十一圓三十二錢
二、支出總額	千九百四十圓二十五錢	ヘ、草履代	七圓五十錢
内 附		ト、審判宿泊及慰勞費	四十圓九十錢
一、幹事委員奔走費	三百七十四圓九十八錢	チ、懇親會場借料	三圓
二、佐賀市本部費	百八十四圓四十五錢	リ、小使手當	二十九圓五十錢
内 附		ニ、會場設備費	二十三圓五十五錢
イ、幹事委員食費	百三十七圓四十五錢	ホ、番人手當(鹿島)	三圓
ロ、事務所調給	二十圓	チ、諸雜費	九圓六十錢
ハ、小使手當	十三圓	九、演說會費用	百二十三圓七十二錢
ニ、茶菓子代	十圓	内 附	
三、新聞廣告料	四十五圓二錢	イ、中食代	三十圓
四、文房具費	四十五圓二十二錢	ロ、懇親會費	五十五圓
五、印刷代	八十圓二十錢	ハ、小使手當	七圓五十錢
六、通信費	三十九圓七十五錢	ニ、草履損料	二圓
七、新聞記者招待費	二十五圓	ホ、餘興費	五圓
八、大會當日費	千二十五圓九十一錢	ヘ、サイダー類	八圓七十二錢
		ト、殘務整理費	十五圓五十錢
		三、殘金額	五百十六圓九十一錢
		右之通相違無之候也	
		會計監督	新 郷 男 一
		會計監行	伊 東 祐 毅

大正十年七月

第十四回佐賀縣學生大會幹事

(イロハ順)

中央大學 商學部學生	原 藤 太
慶應義塾大學理財學部學生	陣 内 勇
東京 商科 大學學生	田 中 武 八
九州帝國大學醫學部學生	副 島 鎮 雄
明治大學 商學部學生	永 淵 益 三
九州帝國大學醫學部學生	中 島 又 吉
東京帝國大學法學部學生	大 坪 保 雄
慶應義塾大學醫學部學生	渡 邊 保 渡
京都帝國大學法學部學生	草 野 時 一
中央大學 法學部學生	愛 野 正 夫
東京帝國大學法學部學生	安 住 剛 夫
早稻田大學理工學部學生	宮 口 剛 夫
早稻田大學商學部學生	諸 限 喜 四 郎
明治大學 法學部學生	關 川 善 雄

石丸 殿